

KINGCA WEEK 2025 感想記

国立国際医療センター食道胃外科

八木 秀祐

日本胃癌学会会員の先生方、いつも大変お世話になっております。国立国際医療センターの八木秀祐と申します。このたび、KINGCA WEEK 2025（開催地：韓国・ソウル）に参加するにあたり、日本胃癌学会より参加助成のご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

今回は「Efficacy and Safety of Conversion Surgery Following Chemotherapy for Stage IV Gastric Cancer: A Retrospective Study」という演題で、デジタルポスター形式にて発表の機会をいただきました。発表はデジタルサイネージによる掲示形式で、対面でのプレゼンテーションや質疑応答はありませんでしたが、国際学会の場で自施設の研究成果を公開できたことは、今後の研究活動への大きな励みとなりました。

私にとって初めての KINGCA 参加となりますが、韓国のみならずアジアを中心とした世界各国から多くの参加者が集まる国際学会の熱気と活気を肌で感じることができました。中でも印象に残ったのが、「JOINT SYMPOSIUM WITH KSGIS – Recent Issues related to Proximal Gastrectomy」です。本セッションでは、噴門側胃切除術後の再建法（Double-Flap Technique と Double-Tract Reconstruction）の比較、術後の内視鏡所見の特徴、再発時の外科的対応、進行癌に対する適応の可能性について、日韓の専門家4名による発表が行われました。

各再建法の特性に関する報告からは、それぞれの術式が術後の QOL、内視鏡的サーベイランス、再手術のしやすさなど、実臨床に直結する要素に大きく関与することが示されました。特に、DTR は再介入の容易さや内視鏡フォローの点で優れる一方、DFT は逆流防止において安定した効果が報告されており、術式選択における判断材料として大変参考になりました。また、進行胃癌に対する PG の可能性を示すデータも提示され、今後の治療戦略の幅を広げる視点を得ることができ、実臨床に直結する内容が多く、大変勉強になりました。今回の学びを今後の臨床と研究活動に活かし、より良い医療の実現に貢献できるよう努めてまいります。

最後になりますが、このような貴重な機会をいただきました日本胃癌学会理事長 掛地吉弘先生、国際委員長 竹内裕也先生をはじめ日本胃癌学会会員の先生方、事務局の方に深く感謝申し上げます。

